

縁—えにし—

その2

安達 真魚



あしかがフラワーパーク(2022.5)

偶然

同じ星座なんて ただの偶然  
同じ街に生まれた それも偶然  
二人は同じニュースを聞いて  
今はコロナ騒ぎのなかにいる

そんなことって ただの偶然  
目の前に君がいただけさ  
これは何かの導きなのか  
遠い過去からの贈り物なのか

とてもとても大きな流れに乗って  
未来の二人を見つめてた

同じプレゼントなんて ただの偶然  
同じ色のマイバッグ それも偶然  
時間合わせに立ち寄った公園

鉢合わせ別れ雨

そんなことって ただの偶然  
目の前に君がいただけさ  
これは誰かの手引きなのか  
定められたストーリーなのか

ずっとずっと待っていた契りの言葉  
流れる涙に消されていく

思い出の公園 言葉も途切れて  
二人記憶辿りながら  
ベンチにかけたまま  
もう会うこともない

とてもとても悲しい別れの儀式  
遠くの景色を見つめていた

継承

生まれたその日から  
探すあてももない自分のいく先  
こころと体 言葉と仕草  
積み重ねた時の流れに

何の因果か自分の生命  
知っているのか輝く星は  
先達の導き 因果応報  
宿命のままに

Inheritance of the time 時代を超えて  
Inheritance of the time 受け継いでいく

何を繋いでいくのか  
探し続ける自分の行く先  
思いと実体 語りと身振り

繰り返した時代（とき）の移ろい

### 巡り合わせ

変わりゆくもの 風にまかせて

星の巡りはとてつもなく

魂の導き 因果応報

天命のままに

Inheritance of the time 時代を超えて

Inheritance of the time 受け継いでいく

この結末の なすべき責務

誰にあるのか変わらぬ大地

不撓（ふとごう）の輝き 因果応報

天意のままに

Inheritance of the time 時代を超えて

Inheritance of the time 受け継いでいく

あの日 あの場所で 同じ気持ちで

もう一度出会えた 二人なのに ア

巡り合わせが悪いと

悩んでも仕方ない

外は雨曇り 退屈そうに

スマホ見てるだけ

巡り合わせはあの時だけ

悔やんでも戻らない

想いも伝わらず 色褪せた日々は

心たがえたまま

あの日 あの場所で 熱い思い出で

もう一度交わした 約束なのに ア

薄暗い歩道

誰かの 影に怯えながら  
泣きながら あの夜  
信じられない言葉

黄昏の街のなかに 光るネオンサイン  
シグナルは青色 足取りは重くて

あの日 あの場所で 強い覚悟で  
もう一度認めあった 二人なのに アー

あの日 あの場所で 同じ気持ちで  
もう一度出会えた 二人なのに アー

星は廻る

石をけりながら歩いた 避暑地の散歩道  
君は笑いながら 視線こちらに向けた

君のしぐさはあどけない 青い空見上げてる  
気楽な顔つきで 道をさえぎった

ただそれだけのこと 平凡な巡り合わせ  
今は一緒に 食事を楽しんでいる  
You were born under a lucky star.  
特別なことは何もない

気まぐれな時代生まれた 大きな祝福で  
不思議なこの命 星は廻り続ける

広い社会の片隅で 毎日が過ぎていく  
大きなため息で 時は流れてく

ただそれだけのこと ありふれたヒューマンライフ  
今も変わらず 暮らし続けている

You were born under a lucky star.

心の乱れは何もない

You were born under a lucky star.

特別なことは何もない

### 夢で見た街

脈絡のない筋書き あの人に出会えた

街はまぼろし

語り合った言葉 聴き取れない

レークサイドのホテル みんな働いている

まどろみの中に 昔の自分がある

夢の中は デジャブ

舞台は巡って 夢の中を歩く

脈絡のないシナリオ あのと時の家並み

人はまぼろし

閉ざされているゲート ベールのなか

グラスコートのテラス みんな楽しんでいる

うたたねの中で 会話続いている

夢の中は デジャブ

遠い日の自分 そこには帰れない

夢の中は デジャブ

突然の目覚め 差し込む窓明かり

夢の中は デジャブ

もう一度あの街 いつしか帰りたい

## 因縁

おれとおまえは 運の悪さ いわくつき  
このかかりあい  
過去からの因縁さ 開き直り

夢見悪いのは おまえの運のなさ  
死なばもろとも 一連托生 回り道

アー いまの世の中 どこから見ても  
ケチがつくほど 縁起が悪いもの

おれとおまえは ツキがない 知らんフリ  
このより集まり  
前世からの因縁さ 共倒れ

げんの悪さは おまえの徳のなさ  
抱き合い心中 一連托生 迂回道

アー 浮いては沈む 木の葉のように  
もだえのたうち 流されていく

意気地ないのは おまえの品のなさ  
舞台飛び降り 一連托生 迷い道

アー 世間の風は どちらを見ても  
生の体に 冷たく刺さる



## 千葉ニュータウンでの時間感覚 —その5—

安達 真魚



千葉県企業局北総浄水場

### 水道水

国道464号を印西牧の原駅あたりから成田方面へ向かうと、2つ目の信号は「北総浄水場」と表記されており、その先を見ると、薄緑の円盤が円筒に支えられた状態の構築物が見えてくる。千葉県企業局北総浄水場だ。大抵の人はあまり気を留めないで、通り過ぎていく。県営水道の上水道配水系統図を見るとわかるが、この浄水場は、利根川から取水した水を浄水し、千葉ニュータウン全域への配水と成田、船橋などの給水場への送水を行っているようだ。したがって、千葉ニュータウンの住人は、毎日利根川の水を浄水した水道水を利用していることになる。県内では、それぞれの地域スタイルで水道事業を行い、水源もさまざまなようだ。水源では、利根川水系の表流水が最も多く、地下水等も13%程度利用されている。水道普及率は、全国平均が98%程度である。東京都と大阪府は100%であるが、それ以外は100%に達していない。意外なことだが、千葉県は95%程度で全国平均より低く、印西市は85%程度でしかない

い。千葉県では、北東部で水道普及率がさらに低い市町村が多いようだ。

自分は、水道水が美味いとか不味いとか、あまりこだわる人ではないと思っている。しかし、転居する際には、少しは気になるものだ。東京に初めて暮らし始めたときにアパートで飲んだ水道水は、あまり美味しいとは思わなかった。自分が育った田舎の水道水では、そんなことを感じたことがなかったからである。後でわかったことだが、実家の水道水は、その地区では透明度の高いことで有名な清流の水を取水していた浄水場から配水されていたのだ。その川は、夏には川泳ぎで人気があり、その一帯で、その川は「隅田川」と呼ばれていた。最近になって、現在も同じ場所に住んでいる同級生に確認したところ、自分たちは市内（福島県いわき市）でも一番美味しい水道水を飲んでいるということだった。

千葉県に移ったとき、職場が現在のJR幕張本郷駅の近くにあった。水は井戸水だったが、普通の水道水のように蛇口から出でいて、まったく不味いとは思わなかつ

た。井戸水特有のことだが、夏は冷たく、冬は暖かい飲料水をいただけた。この水温の一定さは、利用するものとしては、大変ありがたいものである。その頃、住居は船橋の団地にあったが、普通の水道水でカルキ臭が強く、まったく美味しいとは思わなかった。水道水は利根川の水を利用していると聞いていて、何となく納得していた。そのときの水道水が一番不味かったと思う。

その後、船橋から柏に転居した。柏の水道水は、利根川水系江戸川の水と深井戸（深さ200メートル前後）から取水した水をブレンドしたもので、船橋より大分良かった。井戸水の取水箇所は柏市内に40カ所くらいあり、住んでいたマンションのすぐ近くにもあった。当時、井戸水のブレンド率は50%くらいだと聞いていたが、現在は20%に満たなくなっている。地下水のくみ上げが制限されていることと、井戸の老朽化が理由のようだ。

柏市内の増尾地区には、ニッカのウイスキー工場（余市、宮城峡の蒸留所で製造された原酒からブレンドして

ウイスキーを製造している)があるが、井戸水の質が良く豊富なことで立地しているとのことだ。近くに「逆井」という地区があるが、地名は「井戸を逆さにするくらい、水が豊富に湧き出る」という意味らしい。それにしても、井戸水の取水量減少は心配ではある。

千葉ニュータウンに転居した頃からは、浄水器を使用した水を飲むか、ペットボトルで購入した飲料水を飲むようにしているので、水道水が美味いとか不味いとかはあまり気にならなくなっている。

水道水を不味くしているカルキ臭であるが、これは浄水場において塩素殺菌を行っているためだとは誰でも知っている。ただ、この塩素殺菌が健康上重要な役割をしているのだ。竹村公太郎氏は、著書「日本史の謎は地形で解ける」(文化・文明編)で、日本の平均寿命は世界トップクラスだが、その一因がこの塩素殺菌の普及によるものだと明確に示されている。水道は明治20年(1887年)横浜で給水開始され、その後他の都市でも次々と水道が開始されていった。塩素殺菌が開始され

たのは、大正10年(1921年)後藤新平が東京市長のときである。これを契機に、現在まで、乳児死亡率は激減し、平均寿命は急伸した。著者の作成図によると、大正10年頃から平成8年頃までに、乳児死亡率は千人当たり166人から4人に激減し、平均寿命はたゞ「歳から79.8歳まで伸びている。

水道で消毒用に使われている塩素は、強い酸化力を持ち、水のおいを除去するとともに病原性微生物の殺菌などを行うことができる。とくに、一般細菌やインフルエンザウイルスは塩素に弱く、容易に消毒されるようだが、さらに、コロナウイルスに分類されるウイルスに対しては、塩素等による消毒効果は高いため、適切に塩素消毒されている水道水が原因となって新型コロナウイルスに感染することはないらしい。日本では、蛇口から出る水道水の中に一定以上の塩素が残留していることが義務づけられている。ちなみに、塩素消毒はピロリ菌に対しても有効で、高齢者ほどピロリ菌の保有者が多いのは、子供のころに、井戸水を飲んでいたら人が多かったのが原因ともいわれている。

塩素殺菌の重要性を改めて知ることとなったが、これを考えると少しくらいのカルキ臭はがまんできるかもしれない。がまんできない人は、ペットボトルのミネラル水を利用するとか、カルキ臭を除くいろいろな方法を調べて実践すればいいと思う。

今回、水道水を取りあげたことで、いろいろと気づかされるが多かった。なかでも、井戸水など地下水の利用については、認識を新たにした。自分が小さいときに訪れた両親の実家は、どちらも井戸水だった。庭に井戸があり、母親の方の実家はくみ上げる手動のポンプがあった。自分が幼少ころは、自宅の炊事場には水道がなかった。のどが渴いたときは、大きめの甕（かめ）から柄杓（ひしゃく）で汲んで水を飲んでた。おぼろげな記憶なので、井戸水だったのかどうかはわからないが、共同の水汲み場があつて、そこから運搬していたらしい。どちらにしても、全国平均の水道普及率が50%を超えるのは、やっと1960年代くらいになってからのこと

で、それ以前はまだ多くの人が井戸水を使っていたということになる。

現在でも、経費節減や災害時の水源確保などのため、スーパーや学校で地下水を使うところもある。普通の民家でも、ちよつとした土地さえあれば、費用的にも井戸を設けるのが容易になっている。比較的安価に地下水を導入できる技術が普及しつつあるのだ。広告主体の地域紙にも低価格の井戸掘りサービスの広告をよく見かける。地下水の利用は、地盤沈下、塩水化、水質などの問題もあり、条件によっては規制などがあるが、今後需要は増えていきそうだ。

最近、テレビの番組でも水道事業の厳しさが取り上げられることがある。スーパーや学校などの大口客が地下水に切り替えるとなれば、千万単位での減収になるし、ペットボトルでの飲料水需要も多くなっている。一方で、老朽化した水道管の更新などで多額の経費がかかり、水道事業の経営も厳しさを増している。

東日本大震災のとき、実家のあるいわき市でも市内全域が断水となり、復旧までに約1か月程度はかかったようだ。原発事故のこともあったので、しばらく家を離れなければならない親戚も多くあった。水がなければ、炊事、洗濯はできず、風呂、トイレも利用できなくなり、多大な不便を被ったはずである。千葉ニュータウンの生活では、たまに排水施設の維持修繕のために断水になることはあるが、普段、何事もなくライフラインのひとつである水道を利用できることに、改めて感謝しなければならぬ。

### 北総開発鉄道の思い出

大分昔のことだが、北総線の軌道敷設工事の一部に関与したことがある。第一期工事（北初富駅～小室駅間）の建設中の頃で、北総鉄道株式会社は当時、「北総開発鉄道株式会社」という会社名であった。仕事の内容は、鉄道軌道のバラストの下の地盤をどのように改良す

るかであり、地盤の調査と改良方法の提示であった。打ち合わせなどのため、何度か北総の事務所には足を運んでいる。直接の担当者を含め、主に建設関係の従事者が多く、まだ大きな組織ではなかったことを記憶している。当時の会社の実情などもいろいろと説明いただいた。京成電鉄の子会社なので会社の上層部は元々京成電鉄の方であった。

会社名に「開発」がついているのは、鉄道事業に関連して、不動産デベロップメント事業にも参入することを意図したものである。東急鉄道は田園都市線の鉄道事業を進めるにあたり、線路の延伸と沿線の開発、分譲を同期させて事業を成功させているが、そのような事業のイメージを持っていたようだ。当時、すでにいくつかの不動産を所有しているとのことだった。その後、会社名から「開発」をはずしているが、不動産デベロップメント事業は断念したためだろうと理解している。千葉ニュータウンの当初計画人口の34万人は、多摩ニュータウンを意識していることはそのときに知った。しかし、そ

のときでも、すでに計画人口の達成は無理であることは聞かされていた。

当時、自分は所属していた会社の千葉市幕張の現場事務所にいて、国鉄総武線の線増工事（複々線化）に伴う路盤改良に関する調査、検証の受託業務などを主な仕事としていた。土路盤上の鉄道軌道は、通常、地盤となる土を敷きならして、バラストを入れ、その上にコンクリート枕木を置き、レールを通して敷設していた。しかし、地盤となる土が軟弱な場合、軌道としての支持が不足し、最悪の場合、排水できない水がポンピング現象による噴泥などを引き起こし、数多くの不良箇所が発生していた。線路保守担当者は、軌道を常に監視し、悪い箇所にはバラストの補充を行うなど、多大な保守作業が必要な状況であった。このため、総武線においては、当時、国鉄の東京第一工務局（本局は新宿駅南口近くで、現在のJR東日本の本社があった場所にあった）が、線増工事に伴い、改良方法を検討し、逐次、路盤の改良を行っていた。実際に採用した路盤の層構成は、上からアスファル

トコンクリート5 cm、MSLスラグ15 cm（高炉粒調スラグに水砕スラグ、硬化剤を付加した特別に調製した材料）、地盤安定処理30 cm〜50 cm（石灰またはセメントを混合）であった。簡単に言えば、バラストの下を道路舗装するようなものであった。自分は、この改良路盤を含む数種類の路盤を実際の線路の数百mの区間に構築し、列車通行時の路盤内の計器による計測や挙動の観測などを行っていた。実際の列車が走行する近くでの作業なので、当然ながら、資格を持った安全管理者立ち合いのもとでの調査であった。

こういった新しいタイプの路盤を鉄道施設的には「強化路盤」と呼んでいる。北総開発鉄道は、第一期工事で東京第一工務局の工法を踏襲し、この強化路盤を全面的に採用した。層構成も総武線のものと同じであった。初めて現地を案内されたときは、まだ現在の国道464号ができていないときでアクセスは非常に悪かった。現場は、現在の白井駅近辺で、地山の掘削が終了したが、湧き水が十分には抜けていない状況であった。（北総線

の高架、トンネル以外の土地盤個所は立体交差とするために掘割構造になっているが、地下水位を超えて地山を掘削すると、大量の湧き水が発生し、池のようになる。地山を掘削すると、掘削した土の部分の毛細管現象の作用がなくなり、地下水位は次第に下がるが、それまで、地下水を抜き続ける必要がある。）

地盤の安定処理方法を検討するために、現地で地盤と なっている土の採取（サンプリング）を行った。安定処理の添加材の種類と配合率、処理厚を決めるための調査を行うためだ。安定処理の目的は、地盤の支持力がアップし、その上に施工する軌道全体が安定するので、必須と考えていたものだった。

土を採取して面白いと思っただのは、採取場所によって、土質が変わることだった。白井から小室方面に向かつて、それほど長い区間ではないが、砂、関東ローム、粘土の3種類の土が採取できた。関東ロームは総武線でも普通に採取できるもので、いわゆる「赤土」とよばれるものだ。そのときはすでに、掘割として深く掘削した後の地

面であるから、場所によっては相当な深さまで関東ロームが堆積していることが印象に残っている。関東ロームは、富士山の火山灰の堆積土としてよく知られているものだ。含水比が120%くらいで、シルト質の粘土の分類に入る。（土は、土粒子と水で構成され、含水比が120%ということは、半分以上が水ということである。土は、土粒子の大きさにより、粘土は細く、シルト質はやや細かく、砂は粗いというように分類される）関東ローム自体は、工学的にそれほど悪い土ではないのだが、水分を少しでも余計に含んだり、ほぐしたりすると軟弱になる性質をもっている。自分にとっては、馴染み深い土であった。

北総線の第二期工事（京成高砂〜新鎌ヶ谷間）は日本鉄道建設公団（当時）が建設を担当している。こちらは、橋梁、トンネル、高架区間だ。建設費用は最終的に北総開発鉄道に振り替わっているのであろう。

小室から千葉ニュータウン中央方面へは、住宅・都市整備公団（当時）が建設し、北総開発鉄道はこれを借り

受け、「北総・公団線」として運営していたのは周知のとおりである。2004年には会社名を「北総鉄道株式会社」に変更するとともに、「北総線」と改称している。

住宅・都市整備公団の区間においても、強化路盤は採用されている。しかし、層構成材料は異なっている。詳細はわからないが、道路舗装で一般に使用されているHMS（水硬性粒調スラグ）が層厚20〜30cmくらい使用されていると思う。第一期工事のものとは少し異なっており、アスファルトコンクリートの層がない構成だ。国鉄の鉄道技術研究所土質研究室（当時）が発表していた基準を採用している。組織が違い、建設担当者が違えば、目的は同じでも内容が異なるのはよくあることだろう。しかし、層構成設定の抛り所が同じ国鉄の違う部門だったので、ちよつとした違和感を覚えてはいた。

実は、その鉄道技術研究所土質研究室からも路盤の調査業務を受託している。研究所の屋内のピット内に4種類的路盤の実物大軌道を構築し、加振機で疑似の列車荷重を加えたときの挙動を変位計や埋設した土圧計など

で計測するものであった。鉄道技術研究所の地道な研究開発の一端が垣間見えて、いい経験になった。ただ、自宅のあった船橋から国立にある鉄道技術研究所まで通うのは、限られた期間だったとはいえ、大変だったのを覚えている。

北総線は2022年10月に値下げすることに決まった。通学定期を除いて値下げ幅は不十分であろうが、値下げ運動をしている関係者も一般利用者にとっても、ひとまず喜ばしいことである。

鉄道が低運賃であれば、ニュータウンの開発は早まるし、発展のスピードは上がる。不動産の価値も少しは上がるかもしれない。これまで値下げできなかったのは、北総鉄道にもいろいろなさ情があったのであろう。ただ、私企業が運営しているとはいえ、公共の交通機関なのであるから、鉄道会社により距離当たりの運賃が極端に違うのは、国の認可制度がうまく機能していないのと同じか思えない。公共事業を私企業にまかせるのはいいのだが、適切に運営できないのであれば、極端な意見だが、企業

を変えるくらいのはあってもいいように思う。国、自治体の建設や設備などの発注に関しては、どこも入札制度が整備され、汚職や談合問題が厳しく取り上げられている状況の一方で、鉄道会社のように免許さえあれば、事実上、独占的に経営できるのは、同じ公共事業なのに扱い方がチグハグな感じがする。

北総線の強化路盤採用は、時代の要請だったが、それによって増えた建設コストは、多少なりとも運賃に反映されているはずだ。しかし、軌道が安定することで、安全性が増すとともに線路保守コストが低減されていることを考えれば、いい選択だったと思う。

スカイライナーが疾走しているのを見かけると、今でもその頃の時代を懐かしく思うことがある。

## 少年時代（一）

井上陽水の「少年時代」という曲がある。曲の流れの中で季節が変化し、郷愁を誘う曲だ。自分が参加している音楽サークルでも何度か取り上げられている人気のある曲だ。少し地味な曲だと思っていたが、歌詞表示サイトの一覧で、「少年時代」は数ある陽水の曲のなかでも1位か2位になっていたので、驚いた。誰にも少年時代（少女時代）はそれぞれあるが、いい機会なので自分も少年時代のことを振り返ってみたい。少年時代といえば、中学校くらいまでであろう。多くのことは忘れていたが、何か記憶に残るものを記述してみようと思う。

生まれ育った場所は、福島県いわき市内郷宮町という地区で、阿武隈山地の山あいになんか少しく入った炭鉱町であった。常磐炭田のなかでは、ひとつの炭坑（ヤマ）としては最大クラスの炭坑であつたらしい。両親はそこで、主に炭坑従事者を相手に鮮魚店を営んでいた。生まれたのは、

「終戦後何年か経っているので、物心がついた頃には戦後復興がある程度進んでいた頃だと思う。」

江戸期は、平藩から分藩した湯長谷藩の所領の「宮村」であった。山側から平地に向かって「宮川」という川が流れていた。二級河川「夏井川」の支流の支流だ。山を隔てて、南隣には白水地区があり、同様に炭鉱町であった。国宝「白水阿弥陀堂」の浄土式庭園や常磐炭田の石炭の最初の発見地としても有名なところだ。映画「超高速！ 参勤交代」は、八代將軍吉宗の治世のとき幕府が「湯長谷藩白水村の金山を手に入れよう」というくんだりから始まっている。映画の物語なのでどうでもいいことだが、このあたりには石炭はあっても、金山はなく、全くのいいがかりだ。その石炭も幕末になってから発見されたものだ。

「宮川」の両側にあった田んぼの多くは炭鉱事業のため宅地化されていた。炭坑従事者の多くの家族は、いわゆる「長屋」と呼ばれる集合住宅に住んでいた。炭坑従事者以外はそれ以外の場所に居住し、「社外」の人（炭

鉱会社以外の人）と呼ばれていた。その集合住宅には、共同浴場の棟があり、世話所（炭鉱会社が運営した今の管理事務所のようなもので、生活全般の世話をしていたらしい）もあった。共同浴場は、社外の人を含めてすべて無料で利用できた。自分も子供の頃はいつも利用させてもらっていた。

実家の近くには昔からの農家もあり、彼らは主に川から一番遠く裏山を背にした場所で、旧来より地主農家として居住していた。炭鉱ができたのがいつ頃かはわからないが、当時は採炭のためのニュータウンであったことは確かである。実家は2階建ての店舗兼住宅で、ちよつとした商店街の一角にあった。商店街の通りの裏手にもひしめき合うように民家があり、道は狭く雑然とした街であった。今のニュータウンなどとは比べようもないも居住地だ。

商店街には、日常の買い物には困らないくらいの店舗はあった。パン、米、駄菓子、写真、こんにゃく、鮮魚、履物、洋品、野菜、肉、文房具、薬、和菓子、自転車、

アイス、ちよつと離れて、貸本屋や炭鉱会社直営の売店もあつた。通りの近くには、常設ではないが芝居小屋が建ち、上演されることもあつた。残念だったのは、書店や玩具屋などがなかつたことだ。自宅から常磐線の駅のある方向へ10〜15分歩いたところに石炭集積場があり、そこには「金坂銀座」というもう少し大きな商店街があつた。そこには、自宅のある商店街の店舗の種類に加えて、書店をはじめ、スポーツ用品も売っているおもちゃ屋、美容院、パチンコ店、呉服屋、映画館、歯科医院、眼科医院などがあつた。七夕まつりのときのそれぞれの店舗の飾り付けは盛大で、人出も多かつた。ただ、七夕まつりの盛大さは、平（現、いわき駅）の街の方が上であつたし、仙台の方がさらに上だということも聞いて知っていたが、小さな炭鉱町のひとつの商店街としては、負けてはいなかつたと思つていた。ちなみに、毎年、駅前（常磐線内郷駅）の盆踊りには、日本一といわれる珍しい回転する櫓が今でも使用されているが、炭鉱が繁栄した頃の名残のひとつだ。

地形的には、阿武隈山地の一つの谷なので川の左右は山であり、山地の裾の部分、平地への出口あたりになっている。奥には、海拔600〜700m級の山々が連なつて見える。「宮川」は、採炭するときの土砂のためか、いつも黄色味がかつていて、汚れている印象しか受けなかつた。大きな川ではないが、これまで増水時に何度か氾濫している。自分が小学校就学前には床上浸水を経験している。家の前の道路が川のようになつたことは、幼少ではあつたが印象が強く、記憶に残っている。

常磐線からは石炭を運搬するための専用鉄道が設けられていた。当然ながら今であれば人気のあるSL、蒸気機関車が石炭を運んでいた。並行して、資材運搬用か従事者を運ぶ旅客車かはわからないが、やや小型の軌道も併設されていた。こちらの方は、電気軌道であつたらしい。いつかスパリゾートハワイアンズに行ったとき、歴史の資料室のようなところがあつた。そこで、常磐線から山あいごとに山に向かつて、いくつもの石炭専用鉄道が設けられている地図を発見でき、多くの採炭場があつたことを改めて確認できた。

炭鉱の坑内では、炭鉱夫が一番方、二番方、三番方のシフトをとり、終日採炭が続けられていた。落盤事故もよくあった。小学校の授業で先生から、「昔、ある炭鉱で火災事故が発生したため、火災の拡大を止めるために坑道の入口を閉めてしまい、入口目指して逃げてきた多くの炭鉱夫が、入口近くで命を落とす」という痛ましい話を聞いたことがあった。最近になってから、それが自分の住んでいた近くの炭鉱だと知った時には、少なからず驚いた。1927年（昭和2年）常磐炭鉱（株）内郷炭鉱町田坑、坑内火災137人死亡との記録を見つけたことができた。どこの炭鉱であっても、石炭の採掘は坑内での作業なので、炭鉱夫の仕事の過酷さは、採炭の現場にいたこともない子供でも理解できていた。近くに地域の中核病院として福島労災病院があるが、この病院は昭和30年に常磐炭坑とその関連産業における労働災害の発生に対処するために設置されていたのだ。

ちなみに、いわき市内には、炭鉱跡の空洞が多く残っている。常磐自動車道は、茨城県から福島県いわき市に

入るとコンクリート舗装になる。コンクリート舗装は表面が白いので、明色舗装としてトンネル区間などに適用されることの多い舗装である。いわき市内の常磐自動車道ではトンネル区間でもないのにコンクリート舗装が採用された。炭鉱跡の空洞に対応するためだと聞いている。アスファルト舗装だと熱に弱く、高温になったときの陥没の恐れがあるからだ。

## 少年時代（その二）

子供の頃の遊びといえば、ビー玉、メンコ、ベーゴマなどだったが、同じ世代であれば、他の地域でも似たようなものだったろう。ベーゴマは特に好きで、高校生になっても学校の帰りに、恥ずかしくもなく、子供の仲間入りをしてやっていたことを思い出す。また、とくに記憶に残るのは、裏山に上ってやるチャンバラだ。雑木（スツポンの木と呼んでいた）を刀の長さに切り取って、柄（つか）の部分の皮は残して刃の部分だけ皮をはぎ取り、

即製の刀をつくったものだ。裏山といっても、それぞれの農家の所有物なので、ほんとうは勝手に入ってはいけないのだが、子供たちが裏山に登っても何も言わない寛容な農家もあったのだ。家から裏山の入口までは50mもなかった。入口のところは崖になっていて、入口付近に防空壕が掘られていた。入口から斜路があり、20〜30m登ると、1本の柿の木が植えられていて、その先が少し斜度のある平坦なやや広めな畑のような場所に出た。そこがチャンバラなどの主な遊び場だった。その遊び場より先は背の高い木々が生繁っていて、それ以上行けば帰れなくなるような山林だった。阿武隈山地への入口のように感じていた。

川の反対側もやはり山なのだが、炭鉱のズリ山だった。物心ついたときからズリ山だったので、元の姿はわからない。別の炭鉱にはきれいな「へ」の字型の三角錐の形をしたズリ山もあるが、ここは単に草木の少ないボタ山という風情の山であった。閉山後、用済みのズリ山は整地して近くの高等学校の野球練習場として使われたり

していた。今はさらに整地して公共住宅の敷地になっている。当時、その高等学校の練習がないときには、野球などをして遊ぶいい場所であった。全体に草木が少ないので、景色は抜群によかった。ここからは実家付近も眼下によく見えた。周囲は山ばかりだと改めて気づかされる場所であった。

人数の多い年代だったので、小学に入学したときは、1クラス50人くらいで5クラスあった。クラス名は「いろはにほ」で付けられていて、1年生のときは、「ほ」組だった。江戸の火消しと同じだ。さすがに成績のつけ方は、「甲乙丙丁」ではなかったが、田舎の学校とはいえ、今考えても古さを感じる。ただ、自慢にもならないような自慢話ではある。小学生のときの思い出が一番記憶に残るのは、家が火事で全焼したときのことだ。その年は、近くで元旦から大火事があった年だった。小学1年の終わりの3月から4月にかけて、連続的に3回の大火事があった。1回目は小学校が焼け、2回目はその隣の地区、3回目はまたその隣の地区と焼けて、実家は3

回目のときに焼けた。小学校は防火壁で延焼を免れた一部の校舎を除き全焼、2回目、3回目でもそれぞれの地区の大半の家が焼失した。火事があるのは、いつも夜だった。連続的に火事が続いていたので、家が焼けた日も、いつでも避難できるように枕元に着替えとランドセルを用意していた。兄弟5人いたが、家財道具の搬出などには役に立たない小学4年の姉以下3人の兄弟は、手はずどおり風上にある親戚の家を指して逃げていった。逃げる途中、近くに見えた赤々と燃えさかる炎と火の粉はいまでも目に残っている。3回とも同じ放火犯によるものだったらしい。放火犯は、放火した後、「長屋」の共同浴場に一人で悠々と入っていたという逸話が残っている。

入学した中学校は、もともと常磐炭鉱が企業で保有していた学校で、職員養成のための学校だったようだ。自分が入学する頃は市に移管されていて普通の市立中学校だったが、やはり炭鉱の名残が残った学校だった。校章は常磐炭鉱の会社のマークそのもので、いまでも変わ

っていないようだ。校庭は広く、都市対抗の常磐炭鉱のチームの練習場としても使用されていた。バックネットの大きさは当時東洋一だといわれていた。当時の田舎の中学校としては珍しい50mの競泳プールもあった。

ちょうど中学3年のときは前の東京オリンピックの年であった。テレビとか新聞で見ているだけなのだが、クラス全体がその話題で盛り上がった。修学旅行では、観光バスが移動中に完成直後の首都高速の一部を走行した。バスガイドさんが首都高速のことをとくに強調されていたので、記憶に残っている。しかし、この首都高速が高度経済成長の象徴になっていくことは、そのときも、その後も、改めて認識するようにはなかった。

小学校の高学年の頃から、すでに常磐炭田の石炭産業の斜陽化は進んでいたと思う。中学校に入学するとき、同じ小学校の同級生は何もなければ、その上の同じ地域の中学校へ進級するはずなのだ。しかし、同じ中学校へ進級しない同級生は少なからずいた。理由の大半は、親がそれまでの職を失い、新天地へ移り住んでいったため

だろうと思われる。小学校卒業を機に新たに転居した地域の中学校へ入学したのだろう。中学卒業後は、さらに地元からいなくなる者が多かった。高校進学率も低く、集団就職で上京する者も多数いた。街全体で見れば貧しい状況にあったと思う。石炭から石油などへのエネルギーの転換時期だったのだ。その頃の自分はそんな状況を全く認識すらできていなかった。

幸いなことに、実家の鮮魚店は駅前にできたショッピングセンターに出店することができ、家業を継続できた。しかし、残念なことに、自宅のあった商店街も、「金坂銀座」も、時代の波とともに廃れていってしまった。今は往時の面影は全くない。

中学校の同期生に、中学校卒業後に常磐ハワイアンセンター（現在のスパリゾートハワイアンズ）のフラガールなっている者が何人かいると聞いていた。中学卒業後何十年も経つてのことだが、中学校の同期会に出席したとき、フラガールの一期生が同じクラスにいたことを初めて知った。本人が往時のパンフレットを見せてくれた

のだ。映画「フラガール」の主人公のモデルになったダンサーたちと肩を並べて活躍していたのだ。まだダンスの先生で頑張っていると聞き、拍手を送ってあげたい気持ちでいっぱいだった。自作曲「愛を届けて」の制作は、そのときの気持ちが動機づけになった。

実家の近くには、炭鉱遺構と呼ばれる選炭工場跡などの構築物が、まだいくつか残されている。しかし、現在では地元の人も気に留めることもなく、街の様子からここが炭鉱の町だったという名残もなくなっている。いくつかあったズリ山も、整地して新たに土地利用されたり、草木が生い茂っていたりして、そこがズリ山だったとわかるような景観にはなっていない。しかし、卒業した小学校、中学校の校歌はまだそのままのようだ。それらの歌詞の一部には炭鉱の町であることの内容が含まれているから、物理的な遺構ではないが、精神的な炭鉱遺産としてのその証しはまだ残されているといえる。今の生徒たちが、何を感じてこれらの校歌を歌っているのだろうか。

理化学研究所革新知能統合研究センターのチームリーダーに大武美保子先生がいる。知能ロボティクス、人間情報学が専門だ。以前より、認知症対策として、会話による認知行動支援技術の開発に取り組み、「共想法」という手法を開発している。また、NPO法人ほのぼの研究所を主宰し、実践研究を行っている。「共想法」は、写真を見ながら「話す」「見る」「聴く」「考える」を行う会話支援の方法だ。6人程度の参加者が、出題されるテーマに沿って写真を持ち寄り、それぞれの写真が順にスクリーンに映し出される。映し出された写真の持ち主が話し手になって、時間内に話し、その後、周りの参加者から質問や感想を言ってもらって、自分の体験をより深く考える。低下しやすい認知機能を総合的に使い、長持ちする脳の使い方を、一連の活動の中で実践する。実施手順の最後に効果測定が含まれているのがこの手法の特長だ。

仕事の話で恐縮だが、十数年前、先生が、東京大学人工物工学研究センターの准教授のときから、この「共想

法」の実施上のソフトウェア開発の協力をさせていただいている。自分が直接開発にタッチしているわけではないが、当初、この「共想法」のことについては、先生から随分と啓蒙を受けた。確かに、複数の参加者が写真を使ってコミュニケーションするということは、認知症対策の核心的要素がすべて含まれていると思う。

過去のことを回想することは、認知症対策には効果的だといわれている。今回の「少年時代の」の回想も自分の認知症予防に少なからず役に立っているのではないかと思っている。ほんとうは、写真があつて、パートナーとでも、グループのなかでも会話のやり取りができれば最高のかもしれない。このコロナ渦で日常が自粛モードになってしまっているが、この沈滞モードは時間が解決してくれるはずだ。会話の機会も少しは増えてくるだろう。「共想法」を知った頃は、まだ参加者として想定される年齢ではないと思っていたが、今はその想定年齢をとうに過ぎてしまった。今後とも、このような発想を活用しながら自分自身の認知症対策も考えていかなければと思う。

## 里山

柏市大青田地区の山林を拠点に活動している「ちば里山トラスト」というNPO法人がある。ゴルフ仲間の一人が、その法人に参加し、定期的に活動しているので、いつも気になっていた。柏市などから依頼を受けて里山の整備や保全を行っているようだ。活動範囲は、拠点の大青田地区やあけぼの山農業公園などである。2004年くらいから実績があり、内閣総理大臣表彰などいくつかの表彰履歴もあるようだ。NPO法人の目的は、「自然豊かな里山への理解を深め、その保全、整備および活用に係わる活動および事業を積極的に行うこと」と記載されている。活動している本人からは、チェインソーの資格の話とかしか聞いていないので、里山のことや実際の活動の実態などについて、よくわかっているわけではない。

柏市内は、すでに市街地が多く、里山となるような緑地帯は少なくなっている。それでも合併前の旧沼南町は、まだ里山と呼べるようなところが多い。行政としては、

市内の多くが市街地化されているので、里山などのような緑地は、重点的に保全しようと考えているのではないだろうか。

印西市には、里山研究で有名なケビン・ショートさんという方がおられる。少し前のことだが、北総花の丘公園のセミナールームで、彼の講義を聞かせてもらったことがある。講義のあと、公園内を歩き、里山の現地にみたてて、植物などの説明を受けた。興味があつたのは、「里山とはどのようなものか」ということであつた。講義の中でも、説明していたし、そのときも納得していたと思うが、正確に覚えていない。ネットから引用すると、「人々が自然に働きをかけて創り出す環境」ということらしい。講義のなかでも、人が自然の中に入り込んでいつも手入れをしているのが里山だというようなことを強調されていたことは覚えている。

ケビン・ショートさんは、ナチュラルリストといわれているとおり、里山のなかの自然観察、生き物や植物の生態や、加えてそこに暮らしている人々の文化や信仰など

が研究対象になっているようだ。千葉ニュータウンの市街地の周辺には里山として豊かな自然が残っていることが、研究活動の格好の場所だったに違いない。

ちなみに、環境省の自然環境・生物多様性の頁に、里地里山について、次のように記載されている。

「里地里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを巻き巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域です。農林業などに伴うさまざまな人間の働きかけを通じて環境が形成・維持されてきました。里地里山は、特有の生物の生息・生育環境として、また、食料や木材など自然資源の供給、良好な景観、文化の伝承の観点からも重要な地域です。」  
長い文章なので、理解するのがなかなか難しい。

千葉ニュータウンに住んでいる我々は、豊かな自然が残るこの地を選んで住んでいることは幸運だったし、感謝しなければいけない。ここでは、ついでに里山の存在というものを、昔からの日常生活ベースで、もう少し別な視点から考えてみたい。

人々が生きていくためには、衣食住をはじめ文化的な道具など様々なものを必要とする。それらのなかで、基本的に必要な要素は、食料、水、住居、煮炊きや暖をとるための燃料などであると考えられる。それは今も昔も同じであり、千葉ニュータウン周辺の集落に住んでいた人々も同様だ。

ニュータウン周辺の市街地以外地区では、土地利用という面で大きく分けると谷津田、里山（以下、里地里山全体を里山と呼ぶことにする）とがある。居住地は主に里山の一角に設けられ、住む家を建てることになる。谷津田からは主食の米と水が取得できる。一方で里山は、野菜、果樹などの畑であったり、雑木林に自生する木の実が採取できたり、多様な利用をされてきた。なかでも最も重要なのは、燃料や建材として利用する木材資源を採取する場所であったことである。現在のように、電気、ガスがない時代は、木材によりエネルギー資源の確保は必須だったであろう。桃太郎の話のとおり、「おばあさんは川へ洗濯に、おじいさんは山へ柴刈りに」が大切な日常の生活だった。昔の小学校によくあった二宮金次郎の銅像が背負っているのは、薪（まき）か柴（しば）か

議論があるようであるが、どちらにしても、それらが日常の大きな仕事になっていたということだ。自分が小さい頃はまだ、農家を中心に薪とかが積み上げられた様子が見かけられたが、今では時代劇ドラマで見られるくらいだろうか。

例えば、千葉ニュータウン中央駅周辺でも、駅の北側の一带は、江戸期、幕府直轄の牧であった。野馬が生息しているということだけで、それらの全体が里山といえるような場所だった。周囲の村々は野付村として、牧内の整備や管理を義務付けられていたが、一方で、牧内の木材資源などを活用する権利もあった。したがって、それぞれの村が管理する領域、いわゆる縄張りはきちんと決められ、里山としての資源は有効に活用されていたと思う。

里山は、いつの時代も活用の対象になりうる土地だった。それには、今でいう開発行為が伴うのが普通だ。何か農産物を作ろうとすれば、畑を開墾するし、炭づくりを始めようとすれば、整地して炭小屋を建てなければいけない。材木を生産しようとすれば、植林のための整備

を行う必要がある。新たに居住地を用意するのも同じだ。今今んでいるニュータウンも最終的に開発行為によって、成立したものだ。

居住地の開発を除けば、これらの行為で生み出された産物に余剰があれば、それは他の地域に売り渡すことができ、ひとつの産業となる。しかし、里山で、それをやりすぎると、自然破壊や資源枯渇になるのは、今も変わらない。

北総地域でも、古くからの鍛冶を含む製鉄工場遺跡が数多く確認されている。ニュータウンの近くにも多田羅田、金山（柏市金山）のように製鉄工場があったとされる地名が残っている地区がある。鉄は、いつの時代も武器や農機具などを製造するための重要な産業だ。製鉄は昔から先進技術であったが、多量の木材資源を消費した。背景には里山が必ず存在していたはずだ。同じ場所で長い期間製鉄を続ければ、よほど計画的にやらないと、周囲の里山の木材資源は枯渇する。消費過剰で、里山がはげ山になってしまえば、製造場所を移していくことなども容易に想像できる。

里山は、いつの時代もエネルギー資源の供給場所として位置づけられてきた。しかし、現在では、化石燃料などの新しいエネルギー源の出現により、里山で木材資源によるエネルギー供給の役割はすでに終わっている。ただ、地球温暖化やエネルギー問題と関連して、環境保護の対象としての里山が、これまで以上にクローズアップされていくだろう。最近では、里山が太陽光発電に利用されることも多くなり、新たな次元でのエネルギー資源の供給場所となっている。しかし、木の伐採などの開発行為が伴い、単純に好ましい状況だとは思われない。改めて、里山の役割について議論すべき時代になっていると思う。

本文章を書き表すことは、冒頭のNPO法人の活動意義を考えることが大きなきっかけとなった。NPO法人の会員の皆さんは寄る年波に負けず、活動を継続している。改めて敬意を表し、エールを送りたい。里山を身近に感じている我々としては、これからも里山の動向に注視していきたいものだ。

周囲に豊富な里山があるといっても、それぞれ所有している人がいるので、一般の人が直接その中に立ち入ることはできない。その意味では、北総花の丘公園や柏市のあけぼの山農業公園など自然主体の公園は、直接自然と接することのできる貴重な場所になっている。



印西市和泉地区の里山